

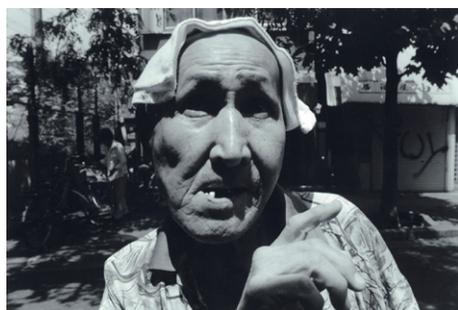
「第1回 伊藤知巳写真賞」決定のお知らせ

JRP/日本リズム写真集団及び写真学校 / 現代写真研究所は2020年、表記の写真賞を創設しました。その主旨は次頁に記しております。多数の応募作品の中から5作品をノミネートし、10月13日最終選考会を開催し、

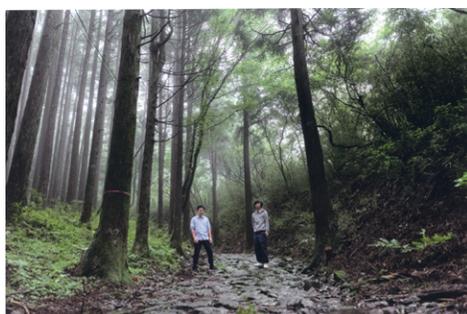
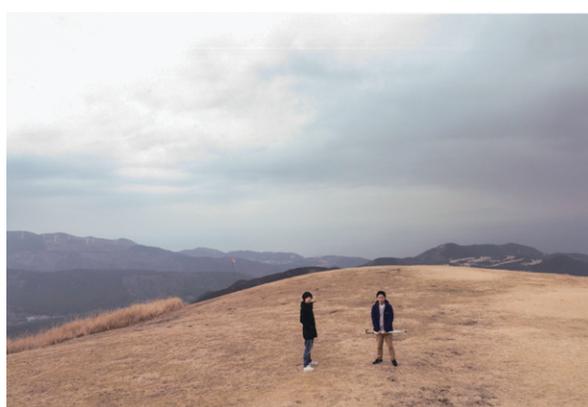
野呂彰「朝な夕な一釜ヶ崎浪漫」 宮本遼「ぼくらの風景」

の2作品を第1回伊藤知巳写真賞と決定いたしましたのでお知らせいたします。

野呂彰「朝な夕な一釜ヶ崎浪漫」 (30枚組)



宮本遼「ぼくらの風景」 (30枚組)



選考経過および決定理由 英伸三 選考委員を代表して

第一回伊藤知己写真賞は、茨城、東京、三重、大阪、愛媛、長崎などから22人、27作品の応募があり、9月11日JRP会議室で、まず賞を決める前のノミネート作品を選ぶ予備選考会を行なった。選考委員の中村梧郎、金瀬胖、尾辻弥寿雄、英伸三（中西篤行は体調を崩し欠席）の4名は、各作品のテーマ内容と写真表現について審査し、5作品を選んだ。ノミネートされた作品は、各プリント30枚をファイルホルダーに入れ、JRP会議室で約一か月間公開して、会員や現研究生などに感想を求めた。

10月13日の本選考会では4名の選考委員に加えて、かつての伊藤知己さんの写真批評活動をよく知る写真家の桑原史成、本橋成一両氏に参加を仰ぎ、候補作品5点の検討を行なった。その結果、受賞作は野呂彰さんの「朝な夕な一釜ヶ崎浪漫」と宮本遼さんの「ぼくらの風景」の二作品に絞られた。野呂作品は、大阪の釜ヶ崎で生きる人々の暮らしがストレートに伝わるドキュメンタリー、宮本作品は風景の中に自分と友人二人を置いてリモートで撮った旅日記といった内容、主題の設定も手法も対照的でありながら、どちらも完成度が高く、見る者に訴える力がある。討議を重ねた結果、多様な写真表現の可能性を示すうえでも両作品は同等に評価するという意見が一致し、この二作品を第一回伊藤知己賞に決定した。

(詳細は「写真リアリズム」290号に掲載)

この写真作品は 機関誌「写真リアリズム」
290号(12月末刊)に掲載のほか
「ありかホール」(東中野ポレポレ座7階)にて
2月1日～7日 写真展を開催します。

伊藤知己写真賞について

伊藤知己の名前を初めて聞く人も多いと思います。でも彼こそがJRPの生みの親とすべき存在でした。戦前、写真人・芸術家は国策のために動員されます。戦後になってようやく「アルスカメラ」が復刊となりました。後に編集長となった伊藤知己は土門拳と手を携え、月例で多くのアマチュアを育てました。軍部に利用された木村伊兵衛や藤本四八、田村茂や伊藤逸平らも写真評論家・伊藤知己のもとに集いました。こうした写真家らの熱意と支援のもとに生まれたのがリアリズム写真集団であり現代写真研究所でした。

それはアマとプロをつなぐ写真運動であるとともに新たな創造を目標としていました。伊藤は若くして夭折しますが、「伊藤知己賞」は彼の生まれ変わりとも言えましょう。受賞作は初回の賞にふさわしい見事な作品となっています。

中村梧郎

受賞作品の主旨文・プロフィール

野呂彰「朝な夕な一釜ヶ崎浪漫」

私は今日も自分の生れ育った南大阪地域をカメラ片手に歩いている。路地裏の小さなカフェに立ち寄る。そこで思い出す、戦後物のない時代から、急速な復興、高度成長へと速なる時代とともに労働者の町として栄えたこの町、その後のバブル崩壊へと激動の時代を生きてきた町。そこで暮らす人々、昭和を見送り、平成を見送った。人々の高齢化も進んでいる。昔からの庶民の文化、風習が残っているこの町。1人で酒を飲んでいる人、片隅で新聞を読んでいる人、思いに耽けている人、友と酒を交わしている人、笑い声が聞こえる、町筋からは演歌が流れている。自由奔放で人に優しい、人情のある町。

今、コロナで不安な時、先が見えない厳しい生活の中、物心両面で優しくささえている人達が活動している町です。

野呂彰 (のろあきら)

1941年 大阪府出身 1961年趣味として大阪をテーマに写真を始める 1995年南大阪地区の下町及び西成地域に専念。

JRP 視点賞、奨励賞 JPS 展 銀賞 毎日新聞写真コンテスト文部科学大臣賞 アサヒカメラ年度賞1位 日本カメラ年度賞1位 フォトコンテスト年度賞1位

個展 「トンボリ」「野呂彰の不自由展」道頓堀ギャラリー香写真集「絆」「トンボリ」(2019年)

中学生の頃から写真に興味があり、日光写真やピンホール写真で遊んだことを覚えています。18歳の頃に中古のカメラを手に入れ楽しんでいました。

宮本遼「ぼくらの風景」

私たちは「歩く」ということを始めた。これが私たちの旅の始まりだった。最初は観光地に行き、そこの寺社を全て回ることから始まり、その次は、旧中山道を半分まで歩いた。最終的な長い旅は東海道五十三次を最後まで歩いたことだったが、それから、住んでいる県内でも、わざと交通機関を使わないで目的地まで行ったり、車を使って自分たちが好きな風景を探したり「自分たちなりの旅」を楽しむようになっていった。私はそれらを写真に残したいと感じ、シャッターを切った。

私がこの作品を通して伝えたいことは、一人の友人の大切さです。もし、現在、何かに悩んでいる若い人がいたら、ずっと続く友人を一人で良いから見つけて欲しいということです。そして、その相手と同じ時を共有し、それぞれの旅に出て人生を豊かにしていただければ幸いです。

宮本遼 (みやもと りょう)

東京都生まれ 昭和音楽大学卒業 現代写真研究所専任講師 第21回酒田市土門拳文化賞奨励賞(2014年)

個展「私の衛星」(2016年) - アイデムフォトギャラリーシリウス 「湘南の海と共に」(2019年) リコーイメージングスクエア新宿

音楽、歩いて旅をした風景、身近な人々の暖かい心を感じ、穏やかに流れる時間とその静けさの中に「音」が響いてくるような作品作りを続けている。

発行者 および本記事に関するお問い合わせ先

JRP/日本リアリズム写真集団 同付属・写真学校/現代写真研究所

275-0026 新宿区四谷3-12 沢登ビル TEL 03-6655-1461 fax03-3355-1462

ホームページ <http://www.jrp.gr.jp> メール jrp@jrp.gr.jp